

氏 名	山 田 哲 也
生 年 月 日	
本 籍	岩手県
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	人博甲第 2 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 23 日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第 4 条第 1 項）
学位授与の題目	ソクラテス以前の哲学にみる古代懐疑主義への道 (The road to ancient skepticism in presocratic philosophy)
論 文 審 査 委 員	委員長 岡 崎 文 明 委 員 柴 田 正 良、砂 原 陽 一 森 雅 秀、竹 内 義 晴、三 浦 要

学 位 論 文 要 旨

古代ギリシアには思想的な素地として「不死なる神」と「死すべき人間」の対比が存在しており、その観点から、認識能力も含めた人間の能力全般に対して有限性が設定されていたが、その限性を宗教的な（もしくは慣習的な）方法とは別の観点から問題視したのがクセノパネスである。

クセノパネスは、今日では自然学的な主張がなされているとみなされている真正断片において、「X(虹)は、本来はY(雲)である (X is really Y.)」という形式の主張を行い、ある一つの諸事物が認識者によって異なる仕方で把握されているという点に着目した。自然学において展開されたこのような主張は、神の認識においてトラキア人とエチオピア人が全く異なる認識結果を提示しているという点に持ち越された。クセノパネスが提示する神の概念は、存在、場所、数、動、全体性という点で、それが正しく認識されるのであれば、認識者の相違によってその認識結果が異なるようなものではなかった。しかし、そのような神の実像を把握するに際しても、人間は個々の文化的な相対性に依存して、神を多様な仕方で把握しているのである。自然的な事物を把握することと、神を把握することの二つの点において、人間の認識の相対性を見出したクセノパネスは、最終的に、その知識論的真正断片において、人間は自らが有する思惑のレベルを越えて認識対象の真の姿を把握することは不可能であると結論付けた。クセノパネスが展開したこのような主張は、今日まで残存している資料をみる限りにおいて、哲学の文脈において懐疑主義的な思想を展開した先駆とみなすことができるだろう。

クセノパネスが生きた時代は前6世紀から前5世紀とみなされているが、当時の思想的な現状において、彼のような懐疑主義的主張は少数派であった。実際、クセノパネスとほぼ同時代人と考えられているヘラクレイトスや、彼に続くエンペドクレスやアナクサゴラスといった非原子論的多元論者達は、人間が対象の実像を明確に把握する可能性を認めていた。しかし、クセノパネスの死から50年ほど後に生まれたとされるデモクリトスに至って、クセノパネスのような懐疑主義的な考え方が再び現われ、原子論という考え方によってさらに先鋭化されることになる。

デモクリトスは人間の認識を感覚による「暗い認識」と思惟による「真の認識」にわけ、前者をアトムによる構成物を把握する認識とし、後者を個々のアトムを把握する認識として、認識方法と認識対象の相違という観点から両者を区別した。デモクリトスにおいて感覚認識は、アトムの無限な多様性を根拠にして想定された認識者個々人の多様性を背景にして、そのメカニズムの観点から、認識者個々人によって異なる相対的な(ノモス的な)結果を帰結するものとされていた。同じ温度の部屋に入ってもある人は熱いと感じある人は寒いと感じるということは現代の我々にとっても日常茶飯なことであるが、古代ギリシアにおいても感覚認識の相対性は話題をデモクリトスに限定するまでもなく認められているところであった。それに対して、思惟による認識に対しては、デモクリトスと同時代を生きたソクラテス・プラトンといった人々の議論に代表されるように、その認識結果に普遍性が認められていた。しかし、残存する真正断片(DK68B10、DK68B11)に目を向けると、デモクリトスは「真の認識」によって成立するアトムの把握についても、その存在を把握することに対しては人間による普遍的認識の可能性を認めながらも、アトムの状態を把握することに関しては、人間がそれを普遍的に把握することは不可能であり、その認識結果は個々の認識者によって異なるノモスとしての認識に留まると主張していた。実際、テオプラストスの証言資料(DK68A135)では、デモクリトスが行っていたとされる真の認識の具体的な内実について、それが感覚認識に基づいてなされていたことがうかがえる証言がなされていたし、このテオプラストスの証言を裏付けるかのように真正断片(DK68B125)では、思惟による感覚の論駁不可能性が主張されていた。つまり、デモクリトスにとって、人間は感覚認識の相対性から逃れられないのであり、常にノモスのなかで生きている存在なのである。

デモクリトスが提示したこのような考え方は、彼の直接の弟子であるキオスのメトロドロスにも受け継がれた。現代には受け継がれていないものの、キオスのメトロドロスには他のソクラテス以前の哲学者達と同様に『自然について』という著作があったということが伝えられている。この著作の内容は、証言資料の記述から、おおよそ、天体や気象現象に関するものであったと考えられるが、問題なのは、この著作の冒頭部分に「われわれが知っているのか、それとも知らないのかということも知らない」という記述が存在していた点である。仮に、この一節に目的語が想定されるのであれば、この一節はそれが何らかの対象について「知っているのか知らないのか知らない」と述べているものであるから、天体や気象に関する言明がなされている『自然について』の冒頭にこの一節が付されているのは、明らかに不自然である。『自然について』の記述内容と、「われわれが知っているのか、それとも知らないのかということも知らない」という一節がその著作の冒頭に付されているという事実とのあいだに生じる相克はどのように解消されるべきなのだろうか。

この相克は、デモクリトスが提示した主張をメトロドロスの学説に読み込むことで解消される。先にも言及したように、デモクリトスは人間が実在(アトム)の状態をノモス的に把握する可能性は認めたが、普遍的に把握することは不可能としていた。この主張をメトロドロスにおいて生じている相克に読み込むと、問題の一節は、天体や気象といった事柄について、それをノモス的には把握しており、その情報に基づいて『自然について』を著しているが、天体や気象を実在(アトム)のレベルにまで至って普遍的には把握していないという主張として解釈できる。そして、そのように解釈するのであれば、この一節が『自然について』の冒頭に付されていることから生じた相克は解消される。以上が、「われわれが知っているのか、それとも知らないのかということも知らない」という一節に目的語を読み込んだ場合に生じる相克を解消する解釈である。

続いて、この一節に目的語を読み込まない場合を考えてみると、その場合にも、この一節の内容は、それが『自然について』の冒頭に付されているという事実と相克を生み、さらに

は、この一節それ自体の内容とも自己矛盾を生じる。目的語を想定しない場合、この一節は、「知る」ということそれ自体について、「知る」という状態が「何であるか」知らないと主張しているものとして解釈できる。そのように解釈すると、メトロドロスは自分の中に「知る」という状態が成立しているのか否かに確証が持てない状態で『自然について』を著していることになる。また、この一節に目的語を想定しないのであれば、この一節は、それが自己認識に対する言明であるという点で言明それ自体の間で自己矛盾を生じる。つまり、この一節を主張している段階で、メトロドロスは自分自身の状態について「我々人間が知っているのか知らないのかについて知らない」のだということを知っているのであり、自分自身の状態について知っているというメトロドロスの状態とこの一節の内容は相互矛盾をきたすのである。

だが、問題の一節に目的語を想定しない場合に生じるこのような矛盾も、目的語を想定する場合と同様に、人間の認識に対するデモクリトスの見解をメトロドロスの学説に取り入れることで解消される。つまり、自分自身において「知る」ということが成立しているのか否かを、ノモス的には知っているが、普遍的には知らないということであり、『自然について』を著すときにも、この一節を主張しているまさにそのときにも、自分自身の状態について「知る」という状態が成立しているのか否かノモス的には知っているが普遍的には知らないということである。

以上のように、メトロドロスの学説にデモクリトスの主張を読み込んだ場合、メトロドロスの学説における矛盾は解消される。メトロドロスが自らの学説に矛盾があることを自覚しながら『自然について』といった著作を記していたとは考えられない。やはり、問題の一節が冒頭に付されていたことも含めて、メトロドロス自身は、自らの著作である『自然について』の内容に整合性が取れていると考えていたとみなすのが妥当であろう。そして、このように考えるのであれば、メトロドロスの学説にはデモクリトスの主張が組み込まれていたと考えることに妥当性が見出せるのである。

さて、クレメンスの資料(DK70A1)には上記のような学説を展開するメトロドロスから古代懐疑主義の始祖とされるピュロンへと至る師弟関係の系譜が報告されていたが、単なる証言上の報告だけでなく、学説上の接点として、メトロドロスとピュロンの間に関係性は見出せるのであろうか。

ピュロンをはじめとした古代懐疑主義の人々の生き方には、「無動揺」へ至る方法として「判断保留」という要素が組み込まれていた。この「判断保留」とは、「それぞれの事柄は、あれであるよりもむしろこれであるということはない」という考え方に基づいて、個々の諸事物相互間にみられる価値の優劣を均等にし、諸事物に対して「それは美である」「それは醜である」「それは正である」「それは不正である」といった価値的判断を保留するものである。だが、仮に、懐疑主義者たちの間で価値判断の基準を普遍的に認識することの可能性が認められていたとするならば、価値の優劣を均等にするという考え方は生じるだろうか。仮に、人間が価値判断の基準を普遍的な仕方で行うことができるのであれば、その基準を用いて諸事物の価値に優劣をつけることができる。つまり、価値判断の基準を普遍的に認識する可能性が認められている限り、「判断保留」という態度は生じないのである。ここに、古代懐疑主義とデモクリトス・メトロドロスの師弟関係とを関連付ける余地がある。デモクリトスとメトロドロスにおいては人間が実在(アトム)を普遍的に把握することの不可能性が主張されていた。つまり、人間はノモスのなかで生きているということなのだが、このような人間観が数世代の師弟関係を経て古代懐疑主義者、具体的には、ピュロンにまでも影響を与えていたと考えることができるのである。

Abstract

In this paper, I attempt to find the road to ancient skepticism in presocratic philosophy. Ancient skeptics practice epochè and finally attempt to reach apatheia, based on the cognitive impossibility, human beings cannot comprehend criterion of value. In this paper, I propose Xenophanes as the beginning of the cognitive impossibility.

Xenophanes focuses on the fact that each people have different knowledge about one thing and decides that human knowledge remains at doxa level and people cannot reach real aspect of objects. Also Democritus has the thought like Xenophanes but his thought based on atomism is more accomplished than Xenophanes. Democritus shows human two judgments, genuine judgment by thought and bastard judgment by perception. The former targets atoms' being and has absolute result and the latter targets things which are composed by atoms and has comparative result. Also atom's condition, Democritus says, is comprehended by genuine judgment but people cannot get absolute knowledge about atom's condition because the genuine judgment's base is comparative bastard judgment. Therefore, for Democritus, human beings live in doxa, except comprehension of Atom's being.

The pupil of Democritus is Metrodorus of Chios. Ancient testimonies say that there is the road from Metrodorus to Pyrrho of Elis, the founder ancient skepticism. In theory of Metrodorus, what is the factor which is related to Pyrrho? The work of Metrodorus, *On Nature*, starts from the passage "None of us knows anything, not even whether we know or do not know¹". The meaning of this passage is that "we don't know absolutely the condition of existence". For this reason, I can insist that Metrodorus inherits the cognitive thought of Democritus and it is the factor to connect Metrodorus with Pyrrho. The base of ancient skepticism is the cognitive impossibility, human beings cannot comprehend criterion of value. Furthermore, I can find the similarity between the human cognitive limit which skeptics set and the thought, people live in doxa, which Democritus and Metrodorus share.

¹ See Freeman (1948), 120.

論文審査結果の要旨

【執筆者の略歴】

執筆者の山田哲也君は、新潟大学教育人間科学部に入学した後、三年次に広島大学文学部に編入学した。卒業論文では原子論者・デモクリトスにおける原子の運動をテーマに論じた。大学院は、本学の文学研究科修士課程に入学し、卒業論文を発展させる形で修士論文を仕上げた。ここではデモクリトスにおいて決定論的自然観と倫理の両者がどのような関連下に結びついているかをめぐって論じた。そして後期課程に進学してからは、クセノパネス、ヘラクレイトス、プラトン、プロクロスなどを幅広く学び、その後に博士論文をまとめた。この3年間でなした学会報告は2回、学会誌や紀要に発表した査読付論文は7本である。これらから在学中になした努力は評価できる。

【論文の目的と構成】

本論文は、ソクラテス以前の哲学者クセノパネスの思想を起点として古代懐疑主義に至るほぼ3世紀間の過程を明らかにすることを目的としている。

全体は、神話を含む古代ギリシアの一般的な人間観を確認した後、クセノパネスから出発して、デモクリトスを経て、キオスのメトロドロスに至るこれら3思想の「断片」を考察し、かつ思想を再構成して、古代懐疑主義の始祖・ピュロンに向かって道を辿るという仕方で構成している。これらの哲学者には思想断片が現存するのみで、これらから思想を再構成するには非常な困難が伴う。これをテーマに取り上げた試みに、成功、不成功は別にしても、学問的な勇気を認めることができるであろう。

【概 要】

本論文によると、クセノパネスはトラキア人とエチオピア人とでは神の認識像が異なっていることを例証にして「人間の認識は相対的であり、限界を持っている」と主張している。そしてこのゆえにクセノパネスを懐疑論の出発点と解釈している。次に、原子論者・デモクリトスはクセノパネスのこの相対・限界説を受けて、「原子の存在」は人間の思惟によって「普遍的に認識することができる」としながらも、「原子の状態やその組み合わせによる物質の状態や存在」は普遍的には認識できず、ただ「約定（ノモス）的に認識することしかできない」とし解釈している。

この解釈によって、本論文は不整合に見えるデモクリトスの認識論を整合的に解釈することにひとまず成功している。これが本論文の独自の点である。

続いて、本論文は、メトロドロスはデモクリトスの原子論を受けて、自然に関して「われわれ（人間）は知っているのか知らないのかは知らない」という一種の不可知思想に至るとする。そしてさらにこの思想を、デモクリトスを下敷きにして、「人間は自然物をノモス的には認識可能であるが、普遍的には認識できない」と解釈する。その結果、『自然について』という論文を残しているメトロドロスの不整合部分を整合化することができるという解釈をしている。さらに後代のピュロンは、精神の安定を図る平静・無動揺の倫理を求めるときにメトロドロスのこの不可知思想から「判断保留」を引き出して「懐疑論」を拓いたと解釈している。これによってピュロンは、人間はノモス（習慣）の中で生きる外に生きる道は無いとする世界観・人間観を取るに至ったと解釈する。

【残る課題】

本論文が扱った資料はいずれも「断片」しか現存せず、したがって元々これらの思想の再構成と哲学的な位置づけには大きな困難が伴う。このゆえにか、資料の読み・検討・評価・解釈に甘さが見られ、ときには強引な論運びなども目に付く。これは今後吟味しなければならない課題である。

【審査の結論】

以上から、課題も残るが、審査委員一同は本論文を博士論文として合格と判定した。